
花笑み～名探偵大学物語～

yoshina

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花笑み〜名探偵大学物語〜

【Nコード】

N3004G

【作者名】

yoshina

【あらすじ】

大学生版平次と和葉のしみじみラブい、且つほのぼの話。平和新蘭高佐設定です。

「で、今度は何を作つとるんや」

「んーと、簡単に言えば毛生え薬かなあ。材料は全部自然のもんでするんよ」

「この前言つてた産学連携のやつか」

「それとは別。こっちはその逆やねん。普通にメーカーのやつ買つたら高いし、自分で作ってハゲ界に革命起こしたとか先生言うたで」

メインの大きなキャンパスから少し離れた、棟の一角にある研究室。

大きさからすると小学校の教室くらいか。

そこで和葉は今まで持っていた試験管をスタンドに戻した。

一見するとただの水にしか見えない管を、机に顎をつけた平次が胡散臭そうに見つめる。

「そつえばお前んとこの教授も……」

「まあ、良い意味での公私混同やね」

彼は和葉が所属するゼミの、頭の寂しい教授の顔を思い浮かべた。どんな研究でも自分自身にも関係することなら、その熱中度合いは違うだろう。

最後まで聞かずとも考えがわかった和葉は、おかしそつに笑った。

「そつや。インスタントやけど、コーヒーでもしたげよか」

「おつ、頼むわ」

彼女は白衣を翻し、片隅に置かれたガスコンロに歩み寄り火をつける。

水はビーカーに注ぐ。

そして前振りには終わったと言う空気になったところを見計らい、本題に入り始めた。

「そんで用件って？　ここやなくても、マンションで会えるのに」「ああ、それやねんけどな。これをちょお見てもらいとうてな」

思い出したように平次は机から顔を上げ、鞆から真空パックに入った茶色のものを取り出す。

ぽんと机に置かれたそれを、和葉は手に取る。

「土？」

平次が神妙な顔つきで頷く。

確かにそれは、ぱさついた感のある土であった。

彼女はしげしげと観察する。

少し固そうな土だ。

あまり人気の無い日陰の地から取って来た物だろうか。

そこまで頭の中で想像していると、ある一部に気付いた。

「……少しだけ紫色に変色してるな」

「そうなんや。実はそれ、事件の捜査中にガイシャの家の近くの空き地で見つけたもんでな」

「そんなら警察に言えばええやん」

「ガイシャの家の庭ならまだしも、近所の空き地やで？　俺もまだこの変色が事件に関連するかどうかもはっきりとわかつたらん。そやし、お前に成分調べてもらおうと思ったんや」

よろしゅう頼みます、と冗談めかして平次は顔の前で両手をぱんとつく。

和葉はそんな彼をジト目で見下ろしてから、肩をすくめた。呆れた、というのではなく了解、という意味でのジェスチャーだ。また人をこきつこーて、とぶちぶち言いつつも彼女はその土を持つて、機材のある棚まで向かう。

「おおきになー」
「はいはい」

彼女はシャーレを棚から取って、そこへ土を少量入れた。

「どれくらいかかりそうや」
「成分調べるだけなら今日中にできるわ。時間あるんやったら待つといて」
「おう」

そのまま和葉は、自分専用の回転式チェアにどかりと座った。元々机にあった顕微鏡にシャーレを差し込んで観察に専念し始める。

その後姿は、いつも自分をたしなめる幼馴染の女の子ではなく、一人の研究者に平次は見えた。

自分の頼みでやってもらうことなので、観察が終わるまでは自分から話かけないほうがいいと判断する。

ひとまず携帯をポケットから取り出し、新一からの事件の続報が無いがチェックした。

待ち受け画面を開くと、一通メールが着信していた。

『土の成分わかるまで帰ってくるなよ』

どうやらまだ行き詰っているようだ。

この土くらいしか解決に関わりそうなものが無いとひしひし伝わるメールで、彼は苦笑した。

自分と同じ東京の大学に在学中の新一は、明日横浜で下宿している毛利蘭と、久しぶりに食事する予定だったそうだ。

それすらも危うくなってきたので、そういったイライラも文面から感じ取れる。

どうにかして解決の糸口を見つけないと。

彼とは反対に事件のおかげで和葉のいる大学に行けた平次は、心の中で呟く。

彼女が薬学に進んでくれてたことが、こんなところで役立つとは思わなかった。

「そういえば、一週間ほど前にもおんなじような依頼で高木刑事が来てたよ」

顕微鏡から目を離さず、和葉がふと話しかけてきた。

彼との会話は終わっていなかったらしい。

平次は意外そうに聞く。

「なんか久しぶりに聞いたな、その名前。今何の事件やっとなのや」
「さあ。それに、依頼自体はうちの教授にやしな。うちは全然ノータッチ。多分、めっちゃムズイ薬品の調査順序とか聞いてはったし、新聞記事には載らんような事件ちゃうかな」
「ふーん」

視界の横でピーカーが沸騰してたので、平次は立ち上がってコンロの火をきった。

側に用意してあったコーヒーの粉をカップに入れて、お湯を注いだ。

「あ、ごめんな」

「ええて、お前はそっち頼むわ」

なにやらピンセットでシャーレの中をかき回していた彼女は、顔を上げる。

「俺も一昨日佐藤刑事目撃したな」

「会った、やなくて？」

「ああ、あれは『目撃』やな。ホテルから走って出てきた容疑者っぽい男にアッパー食らわしとった」

「……相変わらずやね」

二人で頬を緩める。

そして平次は、香ばしい匂いをカップから感じながら、壁に貼つてある時間割に目を遣った。

今日この研究室には和葉しか来る予定が無いようだ。

その彼女も十八時まで、となっている。

先ほどの新一の食事の件も相まって、平次はふとあることを思いつく。

「その調査終わったら、久しぶりにどこか飲みにいこか」

「ええね。勿論平次のおごりやで」

「しゃーないな、依頼料代わりや」

東の名探偵の「俺は蘭との食事キャンセルだっつーのに……！」という台詞が聞こえてきそうだったが、平次は自分の気持ちに素直に従うことにした。

高校時代には無かったものだとは自覚している。

これが、年を重ねるといことだろうか。

重なるにはまだ少々若い平次はくすぐったいものを感じて、思わず首筋を人差し指でぽりぽり搔いた。

その時、和葉が少し笑ったのが背中越しでわかった。

「……なんや」

「んーん、べつつにー？」

きつと同じ事を考えているんだろう。

一層こそばい感覚を覚えて、平次は咳払いをしてから机に突っ伏す。

寝たふりを決め込んで、時間が経つのを待つことにする。

「なんかええよね、こういうの」

「……」

未だに笑っている和葉は、返事の無い平次を気にすることなく、ピンセットを動かし続けた。

時が経った。

二人は大学生になった。

周りも状況は変化した。

それでも、「なんかええ」ものは昔からあったもので、それが最近芽を出しただけなんじゃ無いかと平次は思う。

最近この事件で動きっぱなしだった体に心地よい気分が訪れ、彼は本当の意味で眠りにつき始めた。

そんな彼に和葉が自分の白衣をかけてあげるのは、もう少し後のことである。

（後書き）

偏った好みですが、白衣の和葉が書きたかつたんです（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3004g/>

花笑み～名探偵大学物語～

2010年10月21日20時50分発行